

梅花の水指

この水指は、京焼の大成者の一人である野々村仁清の作である。17 世紀の茶器の原型ともいえるべき優れた作品として、1950 年に重要文化財に指定されている。

仁清は、17 世紀半ばから後半にかけて京都で活躍した。有田（佐賀県）や瀬戸（岐阜県）の窯元で学んだ後、宗和流茶道の創始者である金森宗和（1584-1656）の支援を受けて京都に窯を構えた。その後、仁清はこの水指などの茶器を制作し、朝廷にその名を広めた。茶会ではこれらの容器に、釜に水を入れたり、茶碗をすすぐための清水を入れておく。

この梅の木のデザインは、釉薬をかけて焼いた作品の上に色釉をかける「色絵」技法で作られたものである。その後、再び低温で焼成し、2 層の釉薬を融合させる。

仁清は、色彩豊かな図柄を表現するために、このようなやや黄みを帯びた白色の釉薬をベースとして厚く塗り重ねることが多かった。この作品では、梅の木とその花は、赤、黒、緑の釉薬で描かれ、金彩で変化をつけている。また、幹や枝に施された緑色の濃淡で、樹皮に付着した地衣類を巧みに表現していることにも注目していただきたい。花の一部には、時間の経過とともに酸化する銀彩を使い、やや光沢のある灰色を表現している。